

Title	『晩年』前後の「キャラクター」へ逆行する
Author(s)	小澤, 純
Citation	太宰治スタディーズ. 2010, 3, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97689
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

生誕百年を契機とした『太宰治』の氾濫は、二〇一〇年を迎えた現在においても、止まるどころを知らない。例えば「新潮」二〇〇九年七月号は、創作特集「わたしの人間失格」を組み誌面を大いに賑わせた。数々の映画化を始め、関連書籍は日々書店に並び、既に飽和状態と言つてよい。『太宰』像は、クイズ番組や旅行パンフ等、より断片的な形態で消費され、メディアの至る処に浸透・拡散し続けている。

しかし特権的に扱われたのは、教材関連を除けば、やはり『人間失格』（『展望』一九四八・六〇八）である。第一創作集『晩年』（一九三六・六、砂子屋書房）は遙か後景に退いていると言わねばならず、こうした磁場では、『人間失格』の『大庭葉蔵』から遡及的に、『道化の華』（『日本浪曼派』一九三五・一〇）の『大庭葉蔵』を連結させるか、もしくはスベクタクル化された『太宰』像を媒介として両者を完全に同化させてしまつ。メディアミックスは、その傾向を加速させるだろう。荒戸源次郎監督『人間失格』（二〇一〇・二、角川映画）で『葉蔵』を演じた生田斗真は、街中の看板やテレビCMばかりでなく、角川文庫の太宰作品すべてのカバー写真に登場した。『人間失格』をめぐるメディアイベントについては、松本和也『太宰治』『人間失格』を読み直す（二〇〇九・六、水声社）が周到に追っているが、小畑健による集英社文庫カバーイラスト（二〇〇七・六）が商業的成功を収めた後の展開は特に興味深い。二〇〇九年一月、小畑版『葉蔵』のキャラクターデザインを用いたアニメ『人間失格』が日本テレビ系列で放映、年末からは劇場版が上映された。そしてアニメコミック『人間失格』（二〇一〇・四、集英社）として書籍化も果たす。内容を包むための一枚絵が、遂には、原作本の横に並べ置かれ得る書物の住人となった。

一見「自分」という一人称によって手記を綴つた原作の『葉蔵』と、デフォルメされたアニメキャラとしての『葉蔵』は、余りにかけ離れている。しかし、大塚英志『キャラクター小説の作り方』（二〇〇六・六、角川文庫）の考察を敷衍すれば、両者の起源が共にキャラクター「人格／役柄／記号」であることに変わりなく、更に小田切博『キャラクターとは何か』（二〇一〇・一、ちくま新書）に従えば、内容「コンテンツ」を起源に置く従来の発想を反転させ、商品「キャラクター」としての交換価値から派生し得るメディア産業を史的に把握する視角が要請される。「道化の華」において、書き手の「僕」は、前作の主人公に「私」を使った直後のため、『大庭葉蔵』を用意し、そのネーミングの字面について論評し始める——ここ

では、「私」も『葉蔵』もキャラクター「文字」の水準で並列化される。

ところで、高橋源一郎は、大塚が『初心者のための「文学」』（二〇〇八・七、角川文庫）で「権威」に導かれる空虚な「私」と判断した「女生徒」（『文學界』一九三九・四）に対して、「少数派の少数派」の「ことば」を再現した「革命的な着眼点」（『文藝別冊「総特集」太宰治』二〇〇九・五）を見出している。高橋が、大塚と同様に「私小説における「私」というのは、実際の自分とイコールではなくて、実は立ち上げられた「私」というキャラ」（『メカジ』二〇〇七・二）と述べたことを考えれば、この評価の乖離は、「私」＝「キャラ」を共有しつつも、いかに微細なテクストの強度を読み出すかに関わっていたはずだ。

太宰は「道化の華」を『虚構の彷徨 ダス・ゲマイネ』（一九三七・六、新潮社）に再録する構想を立て、佐藤春夫宛に「それぞれ、真、善、美のサンボルにて、三部曲、之に大きな題を付して、日本文学にはじめてのキャラクタアを編み出すつもり」（一九三六年五月一八日付）と綴った。この「キャラクタア」が現在流通する「キャラ」に縮減されない、広く『特質・特性』の意味に通じていることに注意したい。また、文壇状況を「真、善、美」に分類するのは芥川龍之介「大正八年度の文芸界」（『毎日年鑑』一九一九・一二）が有名だが、実は当時のメディアにありふれた操作概念であったと、山本芳明『文学者はつくられる』（二〇〇〇・二）、ひつじ書房）が指摘している。「芥川」というキャラクターを介して「真」＝自然主義的な「私」への違和を読み込むことは魅力的だが、そのフレームは「道化の華」の再布置化に伴い事後的に生じた可能性もあり、『晩年』刊行に至る過程で変成する個々のテクストの動態を見落とす危険を孕むだろう。我々は、『晩年』前後の「キャラクタア」を微視的／巨視的に吟味するため、鶴のような『太宰』や『葉蔵』を一旦括り出し、同時代の「ことば」の増埒に逆行しなければならない。

だが、現在のみならず、昭和初年代のメディアもまた混迷を極め、当事者達でさえ見取り図を作ることが困難であった。小特集では、狭い視界を多少とも切り開くため、太宰のテクスト群が掲載された諸メディアのコンテクストを、地道に掘り起こすように努めた。一九八〇年代後期から、『晩年』を中軸に置いた解析が飛躍的に進んだことも、研究史のトピックとして記憶化されつつある。だからこそ、今再び『晩年』というキャラクター「霊印」を果敢に読みほどこき、繊細に編み直す時機が来たと言えるのではないか。